阿波藍国際研修会

Awa Natural Indigo International Seminar

川 人 美洋子

阿波藍国際研修会開催

徳島県では、阿波藍を取り入れたイベントがよく開催されていますが、国際研修会の開催は初めてのことでした。徳島県では「文化立県とくしま推進会議」が設立され、個性豊かな文化資源を発信するため四大モチーフ発信事業が行われています。平成 22 年度の事業として「阿波藍」が四大モチーフのひとつに選ばれ、今年度は一年を通じて数多くの阿波藍イベントが行われています。「阿波藍国際研修会(主催：徳島県・文化立県とくしま推進会議)」はその中心的なイベントとして 11 月 5 日から 8 日までの 4 日間「学ぶ、語る、考える。藍に浸る 4 日間。」として開催されました。ここに、報告させていただきます。

阿波藍再考 藍千

今回の連載の中で、徳島県内のわずか 5 軒の藍師が日本全国の藍染を支え、その生産量は 1985 年から 2005 年まで約 1000 俵で安定していると申し上げました。しかしながら、数年前より微減し、2007 年より 1000 俵を切っています。一過性のもので回復するかと思っていたところ、昨年度は 828 俵に減少しました。危機的状況ではないものの、新しい顧客開拓が求められています。

1000 俵の生産と消費が約束されますと阿波藍の伝統が維持できるのですが、徳島県の藍染関係者には、この事実が案外知られていません。そこで、今回のプロジェクトでは、藍染めしたものではなく阿波藍染料そのものを取り上げ、1000 俵の意味を考えていただくために「阿波藍再考 藍千」を掲げ、メインポスターの主役として文化庁から選定された選定保存技術保持者の方々をお願いしました(図 1)。従来の藍染のポスターと違った視点が斬新でした。

1 日目講義(11 月 5 日)

初日は海外から 7 名の講師をお招きし、徳島県内の講師

MIYOKO KAWAHITO
徳島県立工業技術センター 専門研究員
工学博士
〒770-8021 徳島県徳島市雑賀町西開
11-2
Tel: 088-669-4711 Fax: 088-669-4755
E-mail: kawa@itc.pref.tokushima.jp
〈専門〉染色化学
〈趣味〉ホームスパン

図 1 メインポスター
(文化立県とくしま推進会議・デザイン：立花かつこ)

図 2 阿波藍国際研修会・講義
(写真提供：文化立県とくしま推進会議)

2 名を加えて 9 題の発表がありました(図 2)。まず、台湾の Fen-mei Ma 氏は台湾国立工芸研究所において長年研究された台湾の沈殿藍について発表されました。途絶えていた台湾藍の製造復元から染織方法の標準化、さらに普及の実例を詳細に述べられました。同じく台湾の Hsiang-Wen Chang 氏は、故宮博物院学芸員の立場から「故宮博物院

の天然染織品」について、歴史的背景や色について発表されました。

韓国からは韓国自然染色美術館館長の Ji-Hee Kim 氏と韓国重要無形文化財第 115 号染色匠所有者の Kwan-Chae Jung 氏が韓国の天然藍(沈殿藍)の歴史や現状を報告されました。マレーシアからは、アトリエ・サラワクを主宰し織物やファッション分野で国際的に活躍されている Edric Ong 氏が天然染織分野のネットワーク構築の重要性を述べられました。ニュージーランドの大学で教えている Donna Campbell 氏は、マオリの伝統的な染織を使った衣服の彫刻を制作している芸術家でもあり、その活動を報告しました。中国からは台湾や中国で博士号を取得し、現在は上海で天然染織の衣服を製造販売されている Sung-Hee Kim 氏が、天然染織のファッションへの取り組みを発表しました。

最後に徳島県からは、徳島城博物館学芸員の根津寿夫氏が阿波藍の徳島藩での経済的な位置づけを、私が「阿波藍の色の特性」を発表させていただきました。

6 カ国の発表者の共通点は、自国の天然染織の文化や技法の伝統を守り伝えようと行動していることでした。理論も重要ですが、実践者の発表には、20 年以上のキャリアを積んだなかで見える重みを感じさせてくれました。日常生活に、なくてはならないとまでは言えない伝統染織ですが、長く続いてきた事実にはその理由があります。深く考え、知ることの大切さを思う一日でした。

2 日目ワークショップ(11 月 6 日)

2 日目に、徳島県内で阿波藍を使う、キャリア 20 年から 30 年以上の染師の方々 4 名を講師としてお迎えしたワークショップが開催されました(図 3)。「阿波藍を使った灰汁発酵建て」と「絞り染め」を現代の名工でもある古庄紀治氏、「型染め」を原田政則(作家名:ふたあい政則はらだ)氏、「筒描染め」を原田史郎氏、「ろうけつ染め」を林広氏が、それぞれ担当されました。日常的に教えることがない各氏が、今回の研修会のために長年研鑽を積んだ技

術を公開してくださいました。

参加者の中には、阿波藍染めの経験者もいましたが、初めて触れるプロの技術に興味を隠せない様子でした。何故技術を惜しみなく公開できるのか、推測の域を超えないのですが、いくつかの理由があると思います。まずは、国際交流のため日本文化のすばらしさを伝えようとしたのでしょう。公開しても短期間でマスターできない、といった自信もあるでしょう。あるいは、消えてしまうならせめて誰かに伝えたい、といった伝統の厳しい現状からのお気持ちがあったのかもしれません。

前日の講義の講師の方々や海外招待デザイナーの方々も、この日は研修生として参加し、楽しい国際交流となりました。

3 日目フィールドワーク(11 月 7 日)

この日は藍関連施設を見学し、最後に藍染ファッションショーのため徳島城博物館を訪問するフィールドワークが行われました(図 4)。まず、松茂町にある三木文庫と石井町の田中家住宅で阿波藍の隆盛を感じ取っていただけたと思います。いかに阿波藍産業が徳島藩の経済を支え繁栄させた産業であったかを、建造物と豊富な資料が物語っています。続いてこの時期にしか見られない阿波藍の製造工程を藍師外山良治氏の説明とともに見学し、脇町にある観光拠点うだつの町並みに移動しました。「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されている同町並みに藍商佐直吉田家住宅がありますが、そこでは「阿波藍×未来形プロジェクト展」が開催されていました。阿波藍を使う染師、作家、企業がそれぞれ和室 1 部屋を使って各々テーマを決めて展示しました。出展数 24 件は、徳島県でも初めての試みでした。

最後に徳島城博物館の日本庭園でのファッションショーは圧巻でした(図 5)。シーン 1 は、徳島県内のデザイナーや企業のコレクション、シーン 2 は徳島県美容業生活科学課衛生同業組合による和コレクション、シーン 3 が海外招待デザイナー 6 名のコレクションでした。海外からは講演

図 3 阿波藍国際研修会・ワークショップ
(写真提供:文化立県とくしま推進会議)

図 4 阿波藍国際研修会・フィールドワーク
(写真提供:文化立県とくしま推進会議)

図5 ファッションショーに参加した全てのデザイナー(写真提供: Edric Ong 氏)

もお願いした Edric Ong 氏、Ji-Hee Kim 氏、Sung-Hee Kim 氏、Donna Campbell 氏に加え、フィリピンから Alfonso Guino-o 氏と台湾から Sophie Hong 氏が参加されました。それぞれの国で天然染織を用いている代表的なデザイナーの作品は徳島県内の藍関係者に刺激を与えたように見受けられました。

4日目デモンストレーションと パネルディスカッション(11月8日)

デモンストレーションでは伝統的な阿波藍評価技法である「手板法」(佐藤好昭氏)、阿波藍と最も相性のいい素材である綿の糸作り(高本純氏)、徳島の原始布太布の糸作り(石川文江氏)の実演がそれぞれの専門家によって披露されました(図6)。

図6 阿波藍国際研修会・デモンストレーション
(写真提供: 文化立県とくしま推進会議)

休憩を挟み「これからの阿波藍」をテーマに前述の Fen-me Ma 氏、古庄紀治氏に加え藍師の新居修氏、吉田愛二氏、デザイナーの立花かつこ氏、文化立県とくしま推進会議事務局長の鎌田義人氏、同事務局の藤川順子氏をパネラーに、パネルディスカッションが開催されました。Fen-me Ma 氏や立花かつこ氏は、技術的に完成された伝統的なものづくりには、製品だけでなくプレゼンテーションの場にもデザインや感性が欠かせないと述べられました。また、それを受けて染師である古庄紀治氏もデザインの重要性を理解しながらも現状は途上であると認識されていました。お二人の藍師からは厳しい現状でも今の規模を維持していく責任感が感じられました。事務局側からは、ネットワークの重要性が強調され、この研修会を機会にネット

ワークの構築に協力していきたいとまとめられました。会場からは、このような研修会の意義と継続希望の聲が挙がりました。

会議を終えて

阿波藍の小さな規模のイベントは数多くありましたので、これとは違った新しさを示せる研修会にしようと、事務局が1年半をかけて準備してきました。そのため、「阿波藍×未来形」プロジェクトと名づけ、新しい阿波藍のファン作りに努めてきました。

図7 総合パンフレット(デザイン: 立花かつこ)

図8 ファッションショーポスター
(提供: 有限会社アン・モデルエージェント、
写真撮影: 中野道広)

しかしながら、伝統的なものづくりには、長い時間かけて磨かれた良いものが残っていますので、新しいものづくりは言葉で言うほど簡単ではありません。今回は、試行錯誤の中で参加者が作品や意見を発表できたと思います。徳島県内の藍関係者のパネルディスカッションへの参加(平日)が思ったほど伸びなかったのは、現状の厳しさを考えれば納得せざるを得ませんでした。総合パンフレット(図7)とファッションショーのポスター(図8)に、従来の阿波藍と違った印象を受けたと多くの方が言ってくださったので、ここに紹介いたします。

謝 辞

4月から繊維と工業に「阿波藍」に関して現状や特性を思いのまま長期にわたって書かせていただき、今回で無事

終了することができました。このような機会を与えてくださいました「繊維と工業」の編集者の皆様、特に編集長浦川宏氏に深く感謝いたします。拙い文章を読んでくださった方々にもお礼申し上げます。英語の表題について助言を頂きました徳島大学の Don Sturge 氏、連載するにあたってインタビューに答えてくださった皆様、写真や資料を提供してくださった皆様、阿波藍関係者の方々、徳島県立工業技術センターの皆様の支援がなければ連載できませんでした。ありがとうございました。今回の連載に加筆し写真を加えまとめた「阿波藍」を日本語バージョンと英語バージョンの本にまとめることができました。今回のイベントのテキストとして、この本を発行販売してくださった文化立県とくしま推進会議事務局(電話 088-621-2119)にも感謝しています。

藍染工房藍玉

JILL

徳島県藍染研究会

2nd SELECTION

AGAIN amiAi

HAUTECOUTURE BANDO

FORTUNE DRESS

ORANGE

ファッションショー シーン1から 写真提供：有限会社アン・モデルエージェント